

## ～ セピア色の風景 ～

## 「夏模様」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

遠い夏の日の光景は、うるさいほどの蝉の鳴き声とともにあります。川のほとりに建つ正門脇の隠居には、目の前に松の木とシユロの樹があり、そこでお構いなしに鳴く蝉の声は、夏を楽しむにはあまりに大きいものでした。それもクーラーはもちろん、網戸もない家で硝子窓開けっぱなし故でした。

片や母屋も同然で、馬屋も連なり蚊も家に入り放題、食事のときは足元にむせるほど蚊取り線香を焚きながら、蚊を叩き叩きご飯を口に運びました。

加えて夜のご飯時、卓上の紐の下がった蛍光灯めがけて、蛾やらクワガタやらカブトムシが飛び込み、蛍光灯の覆いの埃を落とすので、蛍光灯の灯りを消し隣部屋の蛍光灯をつけ、虫の輩たちをこちらに引き付けておいて、薄暗い中で食事をしたものでした。

いつ刈っていたのか、きつと酷暑となる前だろうが、マコモが庭に干されていて祖父の手製でお盆前には、母屋と隠居の仏壇用に二枚の盆ござができていました。盆入りの前日には盆ござの上に、サトイモの葉が敷かれナス、キュウリ、トマトなど自家製野菜が並び、桑の枝の皮をむいた盆箸が二膳置かれました。盆明けには野菜が盆ござに包まれ、昆布で縛られました。盆箸計4本がナス、あるいはキュウリの脚となり、盆ござを背負う形になり家の前の川から流されました。

ご先祖さんの「帰省」で迷わぬように、庭先で松の木を焚きました。新盆には初めての帰省でさらに迷わぬように、高く灯籠を揚げました。この灯籠、実家ではアゲンドウロウ（揚げ灯籠か）と呼び、三角屋根に四面障子状の壁に覆われ、扉を開けるとそこに

ろうろく立てがありました。揚げる支柱は竹で、先端は十字状になり、最先端と横棒の端は縄で結ばれました。いわば背の高い「アイアイガサ」形状です。先端の三角の角には杉の葉が付けられました。十字状の横棒には小さな滑車を付け、ロープで灯籠を揚げました。

お盆行事で私は、このアゲンドウロウの上げ下げが楽しみで、そんなに新盆がしよつちゅうあるうはずがないのに、私が見たからかよく灯籠の支柱が立っていた記憶があります。

8月の私の心は、花火と盆けむりの色がよみがえる遠い夏模様です。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める